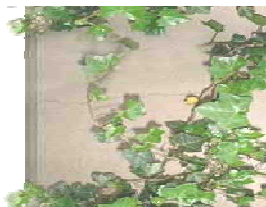


ふるさとの歌人



芥

ぼく

水

すい

牧水のふるさと

わかやまぼくすい めいじ みやざきけんとうごうちょう つぼや う ぼくすい ほんみょう
 若山牧水は、明治十八年に宮崎県東郷町の坪谷で生まれました。牧水の本名は
 しげる ぼくすい ちやうなん かぞく たいせつ そだ ぼくすい
 繁といいます。牧水は長男として、家族にとっても大切に育てられました。牧水に
 さんにな ねえ
 は三人のお姉さんがいました。



女が生まれた縁側(上)と家の中(下)の様子

牧水の生まれた家は、おじいさんが160年前に建てたものです。いまでも昔の姿が残っています。

いえ ちか つぼやがわ なが
 家のすぐ近くには、坪谷川が流れていま
 す。小さい頃の牧水は、この川で 魚つり
 すい えい め まえ おすずやま み
 や水泳をしました。目の前には尾鈴山が見
 えます。近くの山では、山菜やキノコがた
 くさん採れます。自然に囲まれた坪谷で、
 ぼくすい しぜん うつく ゆた まな
 牧水は自然の美しさや豊かさを学びまし
 た。



ぼくすい ほんとう なまえ しげる ながえ げんこ なまえ
 牧水の本当の名前は 繁 といいます。名前をつけるとき、おじいさんは「玄虎」という名前にし
 ようと決めていました。ところがお姉さんたちは「変な名前だからイヤ」といって、おじいさんが
 しんさつ で あいだ やくば い しげる ねが しょうい だ
 診察で出かけている間に、役場に行って「繁 でお願ひします」と書類を出してしまいました。
 しげる どうじ ねえ よ ものがたり で しゅじんこう なまえ
 繁というのは、当時お姉さんたちが読んでいた物 語に出てくる、主人公の名前からきています。

父と母

牧水のお父さんは、お医者さんでした。お酒が好
きで、困っている人の相談になってあげる優しい人
でした。家族の中で、牧水が文学の道に進むことを応援してくれ
た、ただ一人でもありました。

牧水のお母さんは、武士の家の娘でした。自分の考えをしっ
かり持っている人で、山に出かけて山菜などをとることが大好き
でした。牧水はお母さんといっしょに山に出かけました。牧水は
お母さんから自然の美しさや「きびしさ」を覚えてもらいました。



母マキと父立蔵(リゅうざう)

こども時代



牧水が勉強していた頃の坪谷小学校(坪谷小学校所蔵)

牧水は坪谷尋常小学校(今の坪谷小学校)
に入学しました。当時の小学校は4年生までし
かありませんでしたが、よく勉強したそうです。
読書が大好きでしたが、足は速くて運動も得意で
した。

学校から帰ってきてからは、川で泳いだり、山
に出かけて、キノコやヤマモを採るなど、自然
の中で元気に遊びました。このことは、牧水にと
って大切な思い出になりました。

牧水のまじめな性格を表す、おもしろいエピソードがあります。ある日、友達の子が学校で禁止されている指輪を持ってきて、自慢していました。これを見た牧水は、指輪を取り上げ、二度と持たないよう、石でたたいて壊してしまいました。

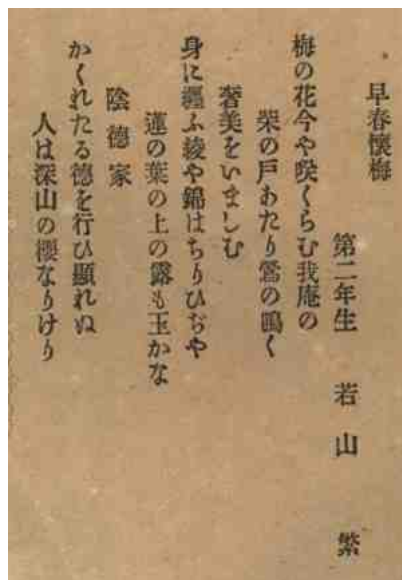


牧水が初めて書いた雑誌



坪谷小学校の頃(十一歳)

延岡時代



初めて作った短歌

小学校を卒業した牧水は、ふるさとを離れて、延岡市の学校で勉強します。文学が好きな先生の影響を受けて、短歌を作ります。大好きな母の名前と水を組み合わせた「牧水」という雅号を使い始めます。雅号というのは、短歌を雑誌などに発表するときに使うペンネームのことです。

友達と雑誌を作ったり、新聞に短歌を投稿するなど、活発な文学活動を行います。延岡は、文学のおもしろさを教えてくれた大切な町です。

大学時代

家族はお医者さんになってほしいと願っていましたが、牧水は文学の世界に進みたいと思っていました。牧水はとても悩みましたが、早稲田大学に入学して、文学の勉強をすることにしました。

同級生には北原白秋がいます。一緒に生活したり、短歌の研究をしました。友達の中林蘇水と北原白秋（当時の雅号は射水）と牧水の三人は、「早稲田の三水」と呼ばれていました。



北原白秋

中林蘇水

牧水



夏休みになって、牧水は東京から坪谷に帰ります。旅行もかねて、大阪まで船で移動して、後は歩いて帰ることにしました。

岡山県に来たとき、遠くまで続く山々を見た牧水は、その美しさに感動して短歌を作りました。旅の歌人としての牧水は、この時、誕生したと言ってもいいでしょう。

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく

おな ぼくすい そのだ さえこ おんな
同じころ、牧水は園田小枝子という女の
ひとす 人を好きになり、恋の歌をたくさん作りま
した。

ぼくすい さえこ
牧水は、小枝子さんに結婚を申し込みま
すが、なかなか返事をくれません。実は
さえこ 小枝子さんはすでに結婚していたのです。
さえこ 小枝子さんはそのことを内緒にしていまし
た。

ぼくすい
牧水は「こんなに好きなのにどうしてだ
ろう」と悩みます。しかし、小枝子さんと
であ 出会い、新しい歌を作るきっかけにな
ったのです。



園田小枝子

やま み やま ひ て うみ み
山を見よ山に日は照る海を見よ
うみ ひ て くち きみ
海に日は照るいざ唇を君

文学の道へ

だいがく そつぎょう ちか
大学卒業が近づくと、牧水は
しょうらい しごと
将来の仕事で悩めます。そ
ぶんがく せかい すす
して文学の世界に進むことを決心
するのでした。

そつぎょう どうじ
卒業と同時に、第一歌集「海の
こえ だ あら じんせい しゅつぱつ
声」を出して、新たな人生を出発し
ます。しかし、新人の牧水が出した
かしゅう きたいどお
歌集は、期待通りには売れず、牧水
はがっかりします。
さえこ
さらには小枝子さんとの恋愛
もんだい
問題がこじれて、牧水はとても疲れ
てしまいます。



第1歌集「海の声」

つか ぼくすい しんしゅう いま
すっかり疲れてしまった牧水は、信州（今の
ながの けん ともだち ところ で しず
長野県）の友達の所へ出かけていきます。静か
しぜん ふうけい なが ぼくすい すこ
な自然の風景を眺めていると、牧水は少しずつ
げんき で かん かん たんか
元気が出てくることを感じました。そして短歌
をつく ふう たび
をたくさん作りました。「こんな風に旅をして、
しぜん なか うた つく ぼく やくめ
自然の中で歌を作ることが僕の役目だ」

ぼくすい しぜん うつく たんか
牧水は、自然の美しさや「きびしさ」を短歌
しょうせつ ひと し
や小説にして、たくさんの人に知ってもらおう
おも
と思いました。



小諸城の石垣
（HP城郭探訪 鈴木氏蔵）

あきくさ はな
かたはらに秋草の花かたるらく
なつ
ほろびしものは懐かしきかな

友人の死

ぼくすい おな じだい かじん
牧水と同じ時代の歌人として、石川啄木がいます。歌集

「一握の砂」などが有名です。牧水は啄木の才能を高く評価して、牧水が作っていた雑誌に紹介していました。

しかし、啄木は病気になる、わずか二十六歳の若さで亡くなります。牧水は、友人として、その最後を見届けました。

はつなつ くも そこ さくらさ お
初夏の曇りの底に桜咲き居り
おとろへはてて君死ににけり



石川啄木
(石川啄木記念館蔵)

運命の出会い

ぶんがく なや れんあいもんだい つか
文学の悩み、恋愛問題の疲れ、さらには友人の死と、牧水は悲しさと寂しさに囲まれていました。「こんな自分を誰か助けてほしい」と思っていました。

ある日、友達の家遊びに行っていた牧水は、美しい女の人と出会います。太田喜志子というその人に、牧水は「ひとめぼれ」してしまふのでした。

それから、牧水は喜志子さんに毎日のように手紙を送り、自分の気持ちを伝えようとします。



太田喜志子

わたし
私は、そうした身をさらして、あなたに
今救いを求めている。寂しい瞳を見張つて、あなたを待っている。少なくとも、同じ心を持った二人が、精一杯に互いが、すがり合って、これから生きていきたいという悲しい心を満たして、あなたを待っている。あなたは、本当に私を救ってくださいるか。

(太田喜志子への手紙)

「あんなにきれいな目をした人に、悪い人はいない」

牧水の手紙の勢いと、誠実な姿で結婚を求める牧水に、喜志子さんは心を決めて結婚することにしました。

ようやく有名になってきた牧水ですが、収入は少なく、結婚式を挙げる事が出来ませんでした。

人生の分かれ道

結婚してしばらく、牧水のお父さんが病気になり、牧水は急いで坪谷に帰ります。帰ってきた牧水は「坪谷に戻ってきて、お父さん達の世話をしなさい」と親戚から求められます。

牧水は文学の道で仕事をしていこうと決めたばかりでした。しかし、親戚から言われたことも、十分に納得できることなので、牧水はとても悩みます。



父は日ましにいいようだ。しかしどうもよほど長びきそうだ。それこれで、とてももう郷里を出られそうにない。

僕は君、この前東京に出たっきり、一回の葉書も出さずにいたのだから、父母を始め親戚は、僕が悪魔になったように思いこんでね。帰るとすぐ、父の病気はそっちのけで、親戚会議が開かれるやら、大騒ぎサ。夜を日についての罵倒には、いささか辟易している。しかし、あの善人の父や母を目の当たりに見るとネ、さすがに強い心も起こしかぬのだ。実にせつない。

(友達の手紙より)



牧水祭の様?

しばらくして父が亡くなり、いよいよ牧水の悩みは深くなっていきます。そんなとき、家の裏山にある、大きな岩に登り、遠くに見える尾鈴山をながめて、心を落着かせていました。

その大岩は、現在は牧水の歌が刻まれ、毎年、牧水の命日に「牧水祭」が開かれています。

ふしぎな尾鈴の山にふしぎな
お水が流れてたふいてありぬ

文学と自然の中で

父の死後、ようやくお母さんから許可をもらった牧水は、ふたたび東京に行きます。

坪谷に帰っているときに作った短歌をまとめた第六歌集「みなかみ」や、各地を旅したときの出来事をまとめた小説が高く評価され、牧水の人気はあつという間に上がりました。

牧水の作品に登場する自然は、とても生き生きとしています。これは、幼いころ、ゆたかな自然にふれて生活していたからです。

こうした中、牧水は東京から離れて、静岡県の沼津に移ります。富士山が見える場所に家をつくり、自然に囲まれた生活を始めます。

沼津に移った牧水は、近くの松林が切られてしまうことを知ります。自然を愛する牧水は、とても悲しくなりました。同時に、松林を守るために先頭に立って演説をしました。牧水や住民のおかげで、松林は残ることになりました。



牧水が愛した干本松林
(沼津市岩山牧水記念館蔵)

私は無論その松原の蔭に住む一私人としてこの事を嘆き悲しむ。が、そればかりではない。比類なき自然のこの一つの美しさを眺め楽しむ一私人として、またその美しさを歌い讃えて世人と共に楽しむ。この蔭に住む一私人の嘆きのみならずである。

(演説の一部)

牧水は短歌や小説を作るために、温泉へよく出かけていきました。お気に入りの宿に1ヶ月くらい泊まり、近くの山や川に行って、その美しい景色を作品に変えていきました。伊豆にある湯ヶ島温泉は山桜がたくさん咲く、とてもきれいな温泉です。坪谷にも咲く山桜を懐かしんで、山桜の歌を作りました。

うす紅に葉はいちはやく萌え出でて
咲かむとすなり山ざくら花

歌人の死



(牧水写真帖より)

沼津に移ってから、**牧水**は、**体調**を崩すことが多く、**大好きな旅**をすることが出来ないこともあり、**加えて**、**家**を建てたり、**雑誌**を作るための**お金**を用意するために、**無理**をして**仕事**をしたので、**ますます体調**を悪くしていきました。

昭和三年九月十七日、**わずか四十三歳**という若さで**牧水**は亡くなりました。**旅**と**酒**を愛し、**色鮮やかな自然**を**短歌**に変えてきた**牧水**の死を、**たくさん**の人が悲しみました。

牧水さんの亡くなられたことは、心から惜しく思います。生前ついに一度も会ってお話する機なく過ぎました。申し上げるのは変かもしれませんが、よく写真で見る牧水さんの顔が好きで、折あらば一度彫刻のモデルに座っていただくことをねだろうなどと思っていたながら、そういう折もついにこず、ついそれなりになってしまいました。わたくしひとりにとっては、これも心のこりの一つです。

(高村光太郎の追悼文)

牧水が亡くなってから、**牧水**の**人気**はますます高くなりました。**色鮮やかな 9000**の**短歌**と、**自然美**にあふれた**小説**を残した**牧水**は、**国民的**の**歌人**として**多く**の**人**に親しまれています。

また、**全国**に約**300**の**歌碑**が建てられ、**今**も増えています。**命日**の**9月17日**には、**生家**の**近く**の**歌碑**で「**牧水祭**」が行われます。**牧水**の**大好きな酒**を**歌碑**に注いで、**牧水**の**すばらしさ**を**確認**しています。

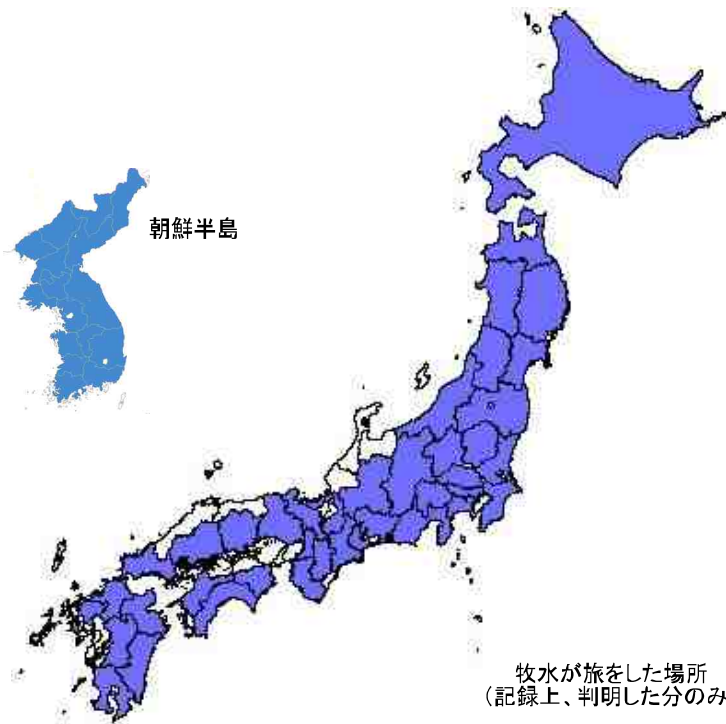


歌祭祭の様子



坪谷小学校の歌碑

牧水と旅



牧水が旅をした場所
(記録上、判明した分のみ)

ぼくすい しぜん うつく
牧水は自然の美しさや「きびしさ」を短歌や
しょうせつ はっぴょう
小説にして発表しようと考え、全国を旅しま
す。ぼくすい じんせい
す。牧水は人生のおよそ三分の一を、旅人として過
ごしています。

ぼくすい やまおく かわ じょうりゅう で
牧水がよく、山奥や川の上流に出かけたのは、
ふるさとに似た風景を探索するためだったといわれて
います。ふるさとや家族のことを表現した短歌が
多いのはそのためです。

代表的な旅の歌



わたし つね おも
私は常に思っている。人生は旅である。我等は忽然として無窮より生
まれ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ。その間の一歩一歩の歩み
は、実にその時の一歩々々で、一度往いては再びかえらない。私は私
の歌をもって、私の旅のその一歩々々のひびきであると思ひなしている。
い かなれば、私の歌はその時々、私の命の碎片である。

(第二歌集「独り歌へる」自序より)

いくやまかわ
幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく

けふもまた心の鐘を打ち鳴し 打ち鳴しつつあくがれてゆく

やま い ゆき なか ほほ き からまつ
山に入り雪の中なる朴の木に 落葉松になにともものをいふべき

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見む このさびしさに君は耐ふるや

問ふなかれいまはみづからえもわかず ひとすぢにただ山の恋しき

牧水と酒

ぼくすい さけ だいす
牧水はお酒が大好きでした。旅先では、

じもと さけ さが の
地元のお酒を探して飲んでいました。み

んなで楽しく飲むこともありましたが、
ひとり しず の さけ す
一人で静かに飲むお酒が好きでした。

しかし、あまりにも飲むすぎて、肝臓が
わる しょうわ ねん がつ にち
悪くなり、昭和三年九月十七日、四十三歳

という若さで亡くなります。牧水は約三
さけ たんか つく
百のお酒の短歌を作りました。お酒を飲

まない人からも人気があります。



焼酎沸かしと愛用の杯

代表的な酒の歌



こんど きゅうしゅうりよう
今度の九州旅行は、要するに大酒ぐらいの私としての最後であつ
た。とにかく思いおくことなく飲んでできた。揮毫をしながら、大きな器
を傾けつつ飲んだ。また、別に宴会なるものがあつた。一日平均
にしょうごう みつ たび あいだ ひとり やくいちごくと
二升五合に見積もり、この旅の間 五十日)に一人して約一石三斗を
飲んでできた、と数字に示されたときは、さすがの私も、ものが言えなかつた。

(大正十三年の九州旅行にて)

しらたま は
白玉の歯にしみとほる秋の夜の 酒は静かに飲むべかりけり

さけ わか し
酒のためわれ若うして死にもせば 友よいかにかあはれならまし

よしこと
夜為事のあとを勞れて飲む酒の つづくうまし眠りつつ飲む

てつびん まへり
鉄瓶のふちに枕しねむたげに 徳利かたむくいざわれも寝む

つまめ めす の
妻が眼を盗みて飲める酒なれば 惶てて飲み噎せ鼻ゆこぼしつ

それほどにつまきかと人のとひたらば なんと答へむこの酒の味

さけ
酒ほしさまぎらはすとて庭に出つ 庭草をぬくこの庭草を

1 升=10 合=1.8ℓ 1 斗=10 升 1 石=10 斗
ということは…

若山牧水年表

年 代 年 齢 で き ご と

明治18年 0 8月 ^{みやざきけんとうごうちょうつばや う}宮崎県東郷町坪谷に生まれる。^{ほんみょう しげる}本名は繁。

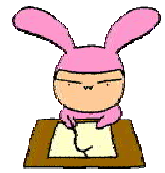


明治29年 11 3月 ^{つばやじんじょうしょうがっこう いま つばやしょうがっこう そつぎょう}坪谷尋常小学校(今の坪谷小学校)を卒業。

5月 ^{のべおかこうとうしょうがっこう にゅうがく}延岡高等小学校に入学。

明治29年 14 4月 ^{けんりつのべおかちゅうがっこう いま のべおかこうこう だい1かいせい にゅうがく}県立延岡中学校(今の延岡高校)第1回生として入学。

明治33年 15 ^{ぶんがく ねっしん たんにん はじ たんか つく}文学に熱心な担任のもと、初めて短歌を作る。



明治37年 19 3月 ^{のべおかちゅうがっこう そつぎょう}延岡中学校を卒業。4月 ^{わせだだいがくえいぶんか にゅうがく}早稲田大学英文科に入学。

明治40年 22 ^{なつやす ちゅうごくちほうたび かえ}夏休みに中国地方を旅して帰り、「^{いくやまかわ たんか つく}幾山河」の短歌を作る。

明治41年 23 7月 ^{わせだだいがく そつぎょう だい1かしゅう うみ こえ しゅつぽん}早稲田大学を卒業。第1歌集「海の声」を出版。

明治45年 27 4月 ^{うた とも いしかわたくぼく し みと}歌の友、石川啄木の死を看取る。



5月 ^{おおたきしこ けっこん}太田喜志子と結婚する。

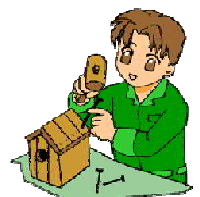
7月 ^{ちち びょうき し とど つばや かえ}父の病気の知らせが届き、坪谷に帰る。

大正2年 28 5月 ^{はは ゆる え じょうきょう}母の許しを得て上京。9月 ^{だい6かしゅう しゅつぽん}第6歌集「みなかみ」を出版。

大正9年 35 8月 ^{しずおかけんかみかぬき ひっこ}静岡県上香貫に引越しする。

大正13年 39 3月 ^{ちち かいき ちょうなん たびと つ つばや かえ}父の13回忌に、長男の旅人を連れて坪谷に帰る。

大正14年 40 10月 ^{ぬまづせんぼんまつ いえ た}沼津千本松に家を建てる。



昭和2年 42 5月 ^{つま いっしょ ちょうせんはんとく りょこう}妻と一緒に朝鮮半島を旅行する。7月 ^{つばや かえ}坪谷に帰る。

昭和3年 43 9月17日 ^{ぬまづ じたく な}沼津の自宅で亡くなる。